



THE ROTARY CLUB OF HIROSHIMA-RYOHOKU

広島陵北ロータリークラブ

- The Weekly Report -

～クラブのテーマ～

こころゆたかなロータリアン

～本年度会長方針～

感謝の心と情熱を



奉仕を通じて
平和を

田中作次

2012-13年度
国際ロータリー会長

第1068回例会 2013年4月24日 No.1039号

■ 会長時間



会長 下田 敬三

皆さんこんにちは、お客さまようこそお越し下さいました。どうぞごゆっくりお過ごし下さい。今日は、広島県立美術館館長、越智裕二郎様には、ご多用の中おいで頂きまして、「夏目漱石の美術世界」と題して卓話をして戴きます。楽しみにしています。宜しくお願い致します。

ゲストとして、入会予定者の若林孝光様に出席して頂いています。例会の雰囲気を知って頂ければと思います。

4月18日安佐南区緑井の第一古川公園で、広島陵北ロータリークラブの社会奉仕活動であります、桜の植樹式が地元関係者7名の方々の出席のもとに行われました。陵北ロータリークラブから6名出席しました。今年度は、陽光桜を7本植樹しました。

本日、親クラブであります広島北ロータリークラブの創立44周年記念例会に私と瀬川幹事とで出席し、お祝いを述べて参ります。そこで、広島北ロータリークラブの今日までの奉仕活動について北クラブのホームページを開いてみますと、地域社会に対しての奉仕活動がすばらしい内容であります。特に、青少年に対する奉仕活動が大変充実していることを知りました。節目の周年記念事業として、奨学育成資金制度の創設等、また、東日本震災復興支援事業にいたしましても、数々の支援事業を実行されています。私は、親クラブのすばらしい実績を参考として、広島陵北ロータリークラブの奉仕活動を計画することも良いのではと感じました。会長時間を終わります。

今回の例会(5月8日)

新入会員歓迎夜間例会

次回の例会(5月15日)

会員卓話 4月・5月誕生会員

出席報告 (例会運営委員会)

4月24日(水)出席者

会員総数	46名	ご来賓	1名
出席会員	35名	ご来客	0名
欠席会員	11名	ゲスト	1名

幹事報告(瀬川幹事)

■ 例会変更

- ・ 広島南RC 例会場変更 国際会議場B2F
5月17日(金)
- ・ 広島廿日市RC 「創立18周年記念夜間例会」
5月13日(月) 18:30～ ※同日変更

■ お知らせ

- ・ 5月17日(金)ロータリー世界平和フォーラム開催に際してのリースセレモニー参加手伝いのお願いをボックス配布しております。出欠のご回答は回覧にてお願いします。
- ・ 来週5月1日(水)は休会です。次回例会は5月8日(水)新入会員歓迎夜間例会ですので、お間違えのないようお願いいたします。
- ・ 5月会費のご案内をボックス配布希望の方のみに配布していますので、ご確認の上お持ち帰り下さいますようお願いいたします。郵送ご希望の方には本日発送いたします。

■ ロータリーレート

- ・ 5月より1ドル98円です。

【例会】 毎週水曜日(12:30～13:30) / リーガロイヤルホテル広島(広島市中区基町6-78) / 082-502-1121

【会長】下田 敬三 【事務所】広島市中区基町6-78 リーガロイヤルホテル広島13F

【TEL】082-221-4894

【幹事】瀬川 長良 【ホームページ】<http://www.ryohoku-rc.jp/>

【FAX】082-221-4870

来 賓 卓 話

文豪:夏目漱石の美術愛

広島県立美術館 館長
越智 裕二郎 様

夏目漱石と「美術」はどこで結びつくのであろうか？実は漱石は美術に造詣深く、美術批評についてもほとんど最初といって良い、鋭い批評家でもあった。その原点は、幼年に存在する。

夏目漱石は江戸、東京の生まれ、家は代々名主の名家である。しかし彼の生まれた年の末に大政が奉還され、幕府は崩壊、即ち生家は没落の運命にあった。加えて両親ともに高齢ゆえ、生後6ヶ月で里子、続いて養子に出され家庭の情愛にも恵まれず、さらに養父母の不和、離婚により9歳頃生家に戻る。しかし家に居場所が無く「床の間や蔵、虫干しの折に見る南画の絵の中に心を遊ばせるしか無かった」と後日彼は記している(『思い出すことなど』)。家にあったのは5,60幅だったそうだが、それらの絵をおそらく彼は記憶したことであろう。ここに生涯の美術好き、晩年南画に傾倒する原点がある。江戸の教養人家庭として狩野派や江戸琳派、若干の中国絵画などは視野に入っていたと思われる。



尋常小学に入って彼は学業優秀であり、東京府より褒状を受ける。結核にかかった長兄、次兄は、夏目家を起こすのはこの金之助だと、彼が帝国大学へ進む道を配慮する。帝国大学で彼は首席を通し、共に漢学の素養抜群であった正岡子規とは刎頭の交わりを結びながらも彼は英文学の道を選ぶ。そこで漱石は天才的な成績を納め、大学院へ進んだ。しかし漢文学と同根と考えた英文学研究は、近代的自我の苦悩をも引き受ける全く違ったものであり、神経衰弱を嵩じて円覚寺に参禅したり、松山そして熊本と東京を離れようとした。

文部省より給費留学生として英国派遣が決まると1900年から約2年ロンドンに留学、そこで文学と、その研究に切り離せないと考えた英国美術研究をノートを取りながら精緻に行っている。彼は美術館に通い雑誌を購入、それは日本に帰ってからも続けている。即ち当時ヨーロッパ最大の経済大国であった英国の、最新の美術事情を彼は日本に持ち帰った。それはターナーについての知識であり、ラファエロ前派であり世紀末美術であり新しいデザインともいべきアール・ヌーボーという潮流の研究であった。

ノイローゼも持ち帰った彼は、その治療にと子規門人、高浜虚子に執筆を薦められて「ホトギス」に掲載したのが、自身の心情を戯画化した『我輩は猫である』である。たちまち評判となり続編を書き続ける一方、図抜けてモダンな装幀の同本出版は話題になり、漱石は『倫敦塔』『坊っちゃん』『草枕』と立て続けに短時日で作品を発表、ついに朝日新聞の招きに応じて、40歳で帝国大学教授から文学作者となった。それら彼の著作に頻繁に表れる美術作品を実際に集めて一堂に展示、彼の美術造詣力をあらためて考えようとしたのが、本展「夏目漱石と美術世界」の本旨である。加えて晩年傾倒した漱石の南画の実作や書家としても名高かった彼の書、そして自身が装幀した漱石全集の自筆原画なども展示されている。

その範囲は広く、英国のテート・ギャラリーやロイヤル・アカデミーをはじめ中国美術、日本の古美術、近代美術(油彩画・日本画)など多岐にわたるものを丹念に集め、その作品に漱石の小説や批評のコメントを記すという、準備にたっぷり2年をかけた画期的な展覧会である。

皆様のご高覧を希う次第である。

